

九種心住について

藤 田 祥 道

いわゆる九種心住とは、初歩的な修行段階にある修行者が心を内に静めてゆくことによって次第に心の安定(cittasthiti, 心住)を深めてゆき、ないし等持(samādhi)の状態に至るまでの過程を(1)内住(śtāpayaṇī)・(2)等住(samīśtāpayaṇī)・(3)安住(avyasthāpayaṇī)・(4)近住(ūpashāpayaṇī)・(5)調順(damaṇyaṇī)・(6)寂靜(samayati)・(7)最極寂靜(vyūpasamayati)・(8)專注一趣(ekotikaroti)・(9)等持(samādhate)の九段階をもって説くものである。それは一面では修行者の等持に至るまでの心理過程の分析であるが、瑜伽行派ではむしろ、等持を目指す初学者が修めるべき一連の奢摩他道として理解され、修行道の中に位置づけられる。そしてこの奢摩他道はカマラシーラの『修習次第』やツォンカパの『ラムリム』といった後代の修行道を説く論書にも受け継がれるのである。本稿ではこの九種心住説に関して、1、その起源と2、『声聞地』における九種心住論について若干の考察を試みたい。

【1】周知のように、『修習次第』或いはこれを踏襲する

『ラムリム』は、九種心住説の典拠を「『聖般若經』等」に求める。これに対して、無著の作偈、世親釈論と伝えられ、事実、初期瑜伽行派の修道論を忠実に祖述していると考えられる『六門教授習定論』は九種心住説を「阿笈摩經に依る」と言明する(T31, p. 775a)。また『瑜伽論』撰決択分には九種心住を説く偈頌(T30, p. 617b. 但し西藏訳は散文形)が世尊説として引用されるが、これも前後の文脈から阿含經典からの引用と推測され、従って、九種心住説の起源は阿含にまで遡らなければならないことになる。さて、現存する諸阿含には數種の心住を列挙する經典が散見されるが、冒頭に挙げた九種の心住を完全に説く(恐らく唯一の)阿含經典として、西藏訳『大空經』をあげることが出来る³。この經には、外空を作証するためには心を内に内住ないし等持すべきであると外空と関連して九種心住が説かれる(Pak. No. 567, Lu281a3-4, etc.)のであるが、これに対して対応經の漢訳中阿含『大空經』及び南伝中部『大空經』(AN112a)の相当箇所はそれぞれ

れ、「持内心住止令得一定」、『ajjhātam eva cittaṃ saṇṭha-
yeti sammādeti ekodikaroti samādhānati』となっており、諸
訳間にかんがりの相違が認められる。さらに、『大空經』以外
では、漢訳諸阿含では例えば『雜阿含』の第500經に六種程の
心住の列挙が見られ、また南伝上座部ニカーヤには上掲の
四種の心住を述べる文章が定型化されており、いくつかの經
典に見出される（その中、MN 19, 20, AN 3. 100 には散漫な世
俗的思考（尋思、vitarka）の減除が等住乃至等持をもたらしことが
示されており、注意を引く）。以上の諸事実は、恐らく阿含の伝
承段階において等持に至るまでの過程が分析・細分化され次
第に増広されて行った経過を反映するものであり、九種心住
の成立はその最後尾に属するものと考えられる。またこうい
った阿含に於ける等持に至るまでの心理過程の分析・細分化
は、南北両阿毘達磨論書にも受け継がれ、ここでは定の定義
として様々な心住の列挙の仕方が見られる³²。

【2】阿含における九種心住は、成立史的見地から見れば
等持に至るまでの心理過程の分析・細分化の一つの帰結に過
ぎず、九種心住以外の心住の列挙の仕方に対して特別な位置
を占めるものでもないし、またそれ自体さほど意味をもつと
は考えられない。これに対して『声聞地』第三瑜伽処ではこ
の九種の心住の一つ一つに到達するための修習内容が規定さ
れており、それによってこの九種心住が等持或いは心一境性

に至るために修習されるべき奢摩他道として理解されている
のである。その内容は、まず(1)内住から(4)近住において心が
外的な諸事物によって翻弄されないように心を内に集約して
ゆき、さらに(5)調順から(7)最極寂靜において心に散乱をもた
らす要因である相（nimitta）、尋思（vitarka）、随煩惱（upakilesa
＝五蓋）に心が捕らわれ流散することのないように防衛し、
かくして(8)(9)心に持続的な三昧の流れが起こる、というもの
である（SBh. pp. 363-365）。この奢摩他道の目的とするところ
は、なんらかの物事に基づいて他律的に思考させられ、常に揺
動させられている散漫な心を、内に集約してゆくことによつ
て自立的で持続的な精神集中の状態に導くことにあるといえ
よう。以上は九種心住に関する一般的規定であるが、さらに同
瑜伽処には、九種心住が「内に「心」を」を集約させることに
よつて瞑想対象を除遣する（adhyatmam abhisankhepata ala-
mbhanam vihvāyati）」という働きを持ち、これが所知事の直
接知覚に到達するための要件であることが説かれている
（SBh. p. 365-366）。即ち、修行者は所知事の直接知覚を目指し
て毘鉢舍那において所知事と同分の影像を心中に思い描く
（勝解する）のであるが、その場合一边倒に毘鉢舍那だけを
加行してはならず、繰り返し九種心住という奢摩他のあり方
に立ち帰って心中の影像を消去（除遣）することが必要であ
り、このように毘鉢舍那による勝解と奢摩他による除遣とを

交互に繰り返すことによってこそ毘鉢舍那において勝解される所知事と同分の影像がより鮮明なものとなってゆき、乃至、所知事の直接知覚に到達するとされるのである（かかる所知事の直接知覚はまた、転依とも関連付けられる（T. 30, p. 450a; SBh. p. 402. 11ff.）。このような止観道の一翼をも担う九種心住の修道論的位置は、しかし同瑜伽処にさらに九種心住説との関係が判然としない五停心観↓四念処↓心一境性という修行道が説かれていることもあって、『声聞地』においては不確か或いは不安定である。しかしとにかく『声聞地』第三瑜伽処は、概して初修行者の当面の目標となる心一境性・身心輕安の体得（これらを体得した初修行者は、色界の定地に属する少量分の作意を得たという理由で「有作意者（*samanaskāra*）」と称されるようになる（SBh. p. 433. 14ff.）に至るまでの道程を説く部分であり、ここに説かれる九種心住もまたこの「有作意者」となるまでの道程において修習されるものと考えられる³⁾。

1 九種心住を説く阿含經典の存在することは、既に一昨年（一九八六）の本学会の口頭発表において向井亮氏によって明らかにされている。

2 水野弘元『パーリ仏教を中心とした仏教の心識論』1964, pp. 417-418参照。

3 cf. *Mahāyānasūtrālaṅkāra*, XIV. k. 15.

△キーワード△ 心一境性、*samatha*、『瑜伽師地論声聞地』

（龍谷大学大学院）

九種心住について（藤 田）

學術大会開催予告

第四十回學術大会は、昭和六十四年九月十五日（金）、十六日（土）の両日、龍谷大学において開催されます。

日本印度学仏教学会